



選考委員特別賞  
リリー・フランキー賞

私の身長計

福岡教育大学附属福岡中学校 二年

山田 柚希

座ることができず、洋式では、お尻が小さすぎて何度も落ちかけたことか。そして小学生。一・二年生以外はずつと一番前。私の代わりを二年間努めた子にも三年以降はずつと抜かれている。もちろん中学校でも一番前。おそらく来年もそうだろう。こんな私の十三年間の成長について紹介しよう。

いきなりだが、私は中学二年生、女子。身長一四五センチ程度。いや、本当は一四三センチ。人に身長を聞かれたら、どうしても二センチくらい鵜を読んでしまう。私の精一杯の見栄だ。話は戻るが、あなたは私のプロフィールを見て、どう思つただろか？「小柄だな。」おそらく、そう思つただろう。そう、私は小さい。私の小さい人生を簡単に見てみよう。幼稚園の年少、年中、年長の間、背の順ではずっと先頭。水道の蛇口は正面から届かず、一番端の蛇口を横から使つていた。トイレスはもちろん和式はまたいだはいいが、足の長さが足りなくて

二〇〇四年三月十五日、福岡の病院で誕生。母が五六時間苦しんだ後の帝王切開であつた為、保育器に入っていたそうだ。ちなみにこの時の身長は五十センチの人並み。体重は三三一二グラム。出産予定日より十一日遅く生まれた私の体は若干大きめ。人生最後の大きめなのがかもしれない。そして三歳になると、いつの間にか、小さい部類に入つてしまつていた。そこから小さな私の日々がスタートした。

三歳一ヶ月で入園。身長は八五センチ程度。上靴はサイズが無かつたため、母にティッシュをつめてもらはっていた。制服は何とかセーフ。運動会の競技の一つであるタイヤ運び。これはタイヤの上に子供を乗せて父親

## ◀子どもノフィクション文学賞 ◎

たちが運ぶという競技。私が小さいから父は楽。結果一位。こういう時は得をする。損ばかりはしてられない！反対に劇発表会で着る衣装は手直しが必要。不器用な母は今までに何着の洋服を思考錯誤して手直ししたのだろうか。四歳の時にピアノを始めたが、これまたペダルが届かず五年まではペダル無しの曲しか弾けなかつた。小学校でピアノ伴奏に立候補した際はオクターヴが届かず一音のみを弾いた。小さいのは身長だけではなく、手から足まで全てが小さい。いや、「全て」ではない。私は一つだけ大きいものを持っている。それは前歯、あごが小さい私は上下とも歯の本数が足りない。そのため矯正をしたのだ。するとなぜか前歯二本だけ大きくなつてしまつた。二本の歯に栄養がいき渡りすぎて背が低くなつたのかな？

こうして三年後。小学校の入学式。一〇二センチで入学。教室の机は高く、少し居心地が悪かつた。小学校の上靴、スマック、エプロン、体操服などなど、何件の店を走りまわつたか。でも私より若干（〇・五センチ）背

の低い子がいたため、前から二番目。しかし二番目でも運動会では大体、赤と白に背の順で分けられるため、一番前。一番前だと行進で辿りつく場所も覚えなければいけないし、本部テントにも近い。親からすると写真やビデオはとりやすい。また「前にならえ。」の時も腰に手を当てなければいけないので正直、好きじゃない。二番目も嫌だなと思つているうちに私は学年でまたまた最小になつていて。たまに同学年の子からもおさがりをもらえるという特典はあつた。おさがりの意味が違う気もあるが：私は今でも家で三歳から着ていている服を今でも着ている。幸か不幸か服を買いかえなくて良いというメリットもある。それによく友達に抱っこされることが多いが、私が友達を抱っこしようとする逃げられる。怖いのだろう。意外と力持ちなのに。

私が通つていた小学校には持久走記録会があつた。男子ども女子、それぞれ分かれて冬の寒い季節にある。女子は一年生が八〇〇メートルで学年が一つ上がるごとに二〇〇メートルずつ距離が伸びる。一年生の時は、名前順

でスタートに並ばされたおかげで前に出れず、十五位。私が二年生の時、奇跡的に四十人中二位になれた。それからの四年間も六位以内には確実に入っていた。「小さいのにすごいね。がんばりやさんね。」と周りからほめられた。

小さいで歩幅も小さく、人の倍走らなければならない。しかし体は軽いのだ。こんな私だが小学校の間は毎年、五・六センチは伸びていた。

高学年になると運動会で組体操が始まる。私は組体操が好き。多分、小さい人は好きでも大きい人は嫌いだろう。私はほぼ必ず上に乗る役だからきつくもないし、ちよつと目立つことができる。それに比べて下の人は重たまし、膝に小石の跡がつくらしい。五年の時、六年との合同ピラミッドで一瞬、私は踏み台として使われるだけだった。そしてこの時、私はある決心をした。

「来年、ピラミッドのてっぺんに立つ！」立つと安定した姿勢がとれないから恐怖はある。でもお腹に力を入れ、ふんばった。「立てた。早く次の笛が鳴つて。」「ピーッ。」

体重的にはかなり可能性が高いはず。たまには小さい人にはいいことなどない。

そして六年の運動会二週間前。まずは背の順に並ばせ

られた。「よし、私が一番小さいぞ。」下の段から名前が呼ばれていく。自分の名前がいつ呼ばれるか分からぬ。胸が高鳴るのを感じた。

「次、二段目……。」

と先生。残ったのは私のみ。正直飛び上がるほど、うれしかつたが、

「はい。」

と落ち着いた声で返事をした。

それから一週間、組体操の時間を楽しみにしながら練習。人の背中を踏むということに抵抗はあつたが、できるだけ早く登らないと下の人は余計にきつくなると思い、急いで頂上に登つた。「成功。あとは先生の笛に合わせて私が立つだけ。」

立つと安定した姿勢がとれないから恐怖はある。でもお腹に力を入れ、ふんばった。「立てた。早く次の笛が鳴つて。」「ピーッ。」

第9回  
△子どもノフィクション文学賞〇

まず私がおりる。喜びたけれど一番下の段の人にはまだ重い。最後の笛で全員整列。友達と喜びをやつと分かち合えた。本番も上手くいきますように。そう願った翌日。

他の小学校でピラミッドの練習中に事故があつたと報道があり私の小学校でも「高さを低くする」と告げられた。かなりがつかりはしたが、組体操ができるならまだし

だ。本番、最初の笛が鳴り少しづつ土台ができていく。残るは私一人。落ちないかという恐怖と成功させたいと

いう期待が入り混じつた気持ちだった。

「ピーツ。」

まず登る。そして立つ準備。次の笛を待つだけ。

「ピーツ。」

立つ！手を左右に指先まで伸ばして胸を張る。できた。

頂上から眺める景色は私にしか見られない。運動場の人の中では私が一番高い。少し誇らしかった。あの時の感情も私にしか味わえない。そう思うと小さくて良かった。

逆に小学校六年間の中で私が一番がつかりしたこと。

それは卒業式の日に保健室の先生から配られたもの。そ

のものは六年間の成長をリボンの長さで表したもの。

私のリボン、他の人に比べると短い：目に見える形で伝えられるヒショックだ。みんなのリボンは長い。私は事実を目の当たりにしてそれが配されるとすぐにランドセルの中にしまった。卒業時の身長は一三四センチ。

中学校に入学。今回、制服は特注。「制服で特注というのは私ならではの経験。小さいだけでなく横もないので既製のものはブカブカだ。しばらくして学級写真の撮影があった。もちろん場所は最前列の真ん中。隣には先生。もう分かるだろう。また先頭。でも唯一先頭でない時がある。出席番号順と避難訓練。出席番号順で「や行」は後ろの方。そして避難訓練はみんなも知つての通り、背の高い順。こんな時こそ早く逃げたいのに。あと、私が一番前で嫌な時。それは全校集会。先生が前で話す時にいきなり質問してくる先生がいる。そういう時、ほとんどの場合、一番前の人があたる。大体そういう時は顔を少し下に向ける。緊張の瞬間だ。

私は小学三年生の頃からバスケットボールを習っていたので部活

はバスケ部。バスケットボールは背の高い人が圧倒的に有利なスポーツだ。だからこそ、このスポーツに挑戦したかった。背の低い選手だってNBAに行っている。バスケをすれば背が伸びるという噂も聞いたが、毎年五・六センチから変化なし。両親がバスケ経験者なので小さなプレーヤーを生かす技を教えてもらひながら一年生の時からどうにかスタメンで頑張っている。入学当時よりも六センチ、バスケットゴールに近くなつた。次の中総体にはあと十センチ近くなりたい。そんな私だが、中一の冬、ついに…一四〇センチ達成。他の人は「一六〇までもう少し。」とか話しているが私は自分のペースで大きくなるんだ。そう決めた。これが私の成長記録。この十三年間を著せたのはアレのおかげ。それは私の部屋の棚の柱。その柱は私の身長計。柱には十三年間の成長の記録が記してある。私の身長だけでなく柱に赤いラインが引かれている。そのラインは私の母の身長。絶対に赤いラインを超える。小さい私だった日々のゴールテープをきり、「大きな私」へのスタートラインをまた

ぐ。